

個が生きる表現活動

21世紀に向かって、子どもたちが国際社会の中で生きていくために、日本の小学校教育はどうあるべきなのでしょうか。

私たちは、子どもたちの生涯学習の基礎を養うために、自ら学ぶ意欲を身につけさせると共に、21世紀に向かう社会の変化に、主体的に対応できる思考力、判断力、表現力を学習の中で育てなければならないと考えております。また、小学校の教科等の基礎的、基本的内容を身につけさせると共に、子どもたち一人ひとりがもっているものの見方・考え方、即ち、個を生かしたものの見方・考え方を育て、更に、個に応じた学習をしなければならないと考えております。これらのこととを実現するために、私たちは「個が生きる表現活動」という主題のもとに、研究と授業実践を続けてまいりました。

昔、アリの行列を踏みつけそうになった二人の男がいました。そのうちの一人は、アリを踏みつけて殺すのは、かわいそうだと思って、行列をまтайで歩きました。このことを後に知った人たちは、アリとはいえ、小さな生命を思いやる、彼の美しい心に感動したのでした。他の一人は「なぜ、アリは行列を作つて歩いているのだろうか。」と不思議に思い詳しく調べてみるとしました。

アリは、えさをみつけると、巣に帰つて仲間をつれてきます。この時、道が分かるようにお尻から液を出して、地面につけながら歩いていくのです。これを道しるべフェロモンといいますが、これを目印に、多くの働きアリがえさまでたどりつき、力を合わせて、えさを巣に持ち帰ります。研究の結果、この道しるべフェロモンは、4-メチルピロール-2-カルボン酸メチルを含んでいることが分かりました。

私たちは、このように、個々が持つ独特なものの見方、即ち、個を生かしたものの見方を、また、新しい発想を生み出すもとになる直観力や表現力を、子どもたちの学習の中で育てていきたいと考えております。

本研究は、82年にわたる歴史の上に積み重ねられてきましたが、戦後は総合生活学習の「久留米プラン」を、ついで、元校長、元学長の大賀一夫先生を中心とする「主体を育てる」研究を基礎にしながら、「創造性を育てる」「創造的学び方」「対話的思考を育てる」「思考を深める学習活動」「思考を高める操作学習」の研究へと、発展してまいりました。

私たちは、過去3年間、子どもたち一人ひとりの個を生かし、子どもたちの表現活動を育てていくための、研究と授業実践を続けてまいりました。このたび、その成果を「個が生きる表現活動」として、まとめることができました。多くの読者諸賢のご批判をいただき、私たちの研究と授業実践が更に深まり、教育界にいささかでも貢献できれば幸いであると考えております。

この小書は、本校にご縁のある方がたの熱心なご指導をいただいて、できあがりました。本書の理論構成については、本学の寺尾慎一先生のご教示をいただきました。また、前校長の笠栄治先生をはじめ、本学の多数の教官ならびに、本校の多数の先輩教官の方がたから、貴重なご指導をいただきました。厚く御礼申しあげます。

また、出版にあたって、なにかと便宜をはかつてくださいました、明治図書の江部満氏と樋口雅子氏に深く感謝いたします。

昭和63年1月

福岡教育大学附属久留米小学校

校長 矢野 克巳